第24号住居跡出土石材観察表（第55図）

図版内No.	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	石　質	出土位置	備　　考
S 1	15.5	14.2	1.2	0.49	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ前方部	両面被熱
S 2	25.1	12.5	2.3	1.08	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ袖部	両面被熱

第27号住居跡出土石材観察表（第60図）

図版内No.	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	石　質	出土位置	備　　考
S 1	8.5	8.3	6.5	1.37	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ	一部被熱 直立して出土

第28号住居跡出土石材観察表（第62図）

図版内No.	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	石　質	出土位置	備　　考
S 1	19.2	8.5	2.2	0.62	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ前方部	片面被熱

第32号住居跡出土石材観察表（第67図）

図版内No.	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	石　質	出土位置	備　　考
S 1	17.4	12.2	1.6	0.52	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ	両面被熱

第33号住居跡出土石材観察表（第67図）

図版内No.	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	石　質	出土位置	備　　考
S 1	14.4	7.8	2.3	0.39	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ	両面被熱

3．中世

（1） 土壙（第72・73図）

第1号土壙

B－2グリッドに位置する。平面形は左右非対称の不定形である。長さ3.5m、幅2.0m、深さ1.9mを測る。壁部は北側壁部のみがえぐれ、底部は平坦になる。覆土は自然堆積によって完全に埋まる。用途不明である。出土遺物は縄文土器片の他、中世の板石塔婆（第72図3）、砥石（第72図4）が出土した。

第6号土壙

A－15グリッドに位置する。中世の地下式壙である。中世の堀跡であるSD2と重複するが、SD2の斜面部を利用して入り口を構築したものとおもわれる。入り口部から主体部につながる途中の壁沿いに方形の浅いピットがみられる。主体部は南側に張り出し部があり、奥行きが方形になりそうだが、北側半分が未掘部分であり、全体の平面形態は不明といわざるを得ない。底面はほぼ平坦であるが、入口部とのつなぎ部分で若干の段差がみられる。遺構の規模は、入口部からの奥行きが4.5m、入口部の幅が1.2m、主体部底面の深さが1.7mを測る。遺物は出土しなかった。

（2） 溝跡

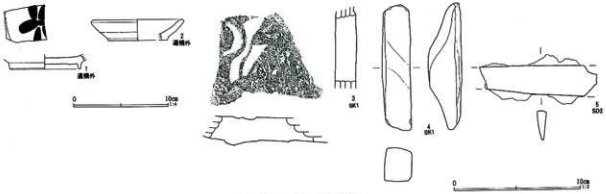
第2号溝跡（第7・72・75図）

東区（C・D区）の尾根すじを南北に貫く溝で、ほぼ直線的にのびる。上幅1.8～2.0m、深さ1.5～2.0mの薬研堀である。近世遺構の区画溝とおもわれるSD3・4・5と一部重複する。遺跡の立地する尾根すじに直交するかたちに構築されており、調査区の東側の尾根先端部には土塁状遺構や平場状遺構が現地形で観察されることから、SD2は中世から戦国期にかけての城郭遺構にともなう堀切であると推定される。

覆土中から小刀とおもわれる鉄製品（第72図5）が出土した。

（3） 遺構外出土遺物（第72図1・2）

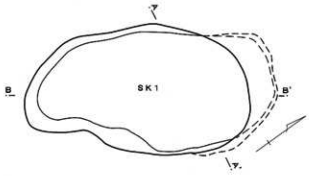
1は陶器で底部に花弁模様をもつ。2はかわらけである。

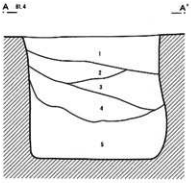


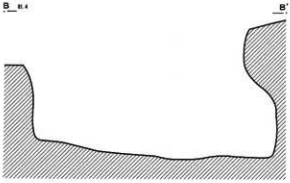
第72図　中世出土遺物

グリット出土中世遺物観察表（第72図）

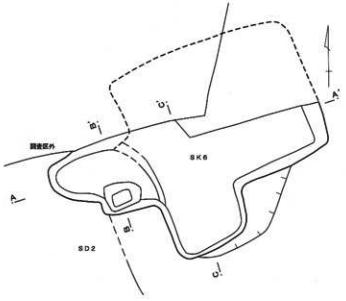
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	写真図版
1	鉢	—	—	(7.3)		良好	淡黄	破片	底内面花弁文　B4グリッド出土	15-2
2	かわらけ	(5.8)	2.1	(6.3)	BCE	良好	明黄褐色	25	B4グリッド出土	15-2
3	板石塔婆	長さ7.3cm　幅8.7cm　厚さ2.2cm　重量285.48g							緑泥片岩製　SK1出土	15-2
4	砥石	長さ9.9cm　幅2.2cm　厚さ2.6cm　重量70.76g							SK1出土	15-2
5	小刀	現存長9.3cm　幅2.4cm　厚さ0.7cm　重量54.12g							SD2出土	15-2

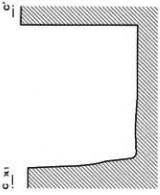


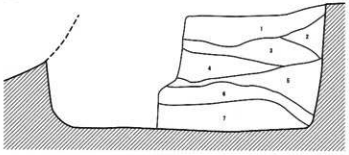




第1号土壙
1　暗褐色土　　地山粒子少量
2　暗黄褐色土　ロームブロック多量
3　暗褐色土　　ローム粒子多量　ロームブロック少量
4　黄褐色土　　地山粒子少量
5　黄褐色土　　地山粒子・地山ブロック多量







第6号土壙　東区
1　暗褐色土　　粗い黄白色粒子多量
2　黄褐色土　　黄白色ブロック多量
3　暗褐色土　　黄白色粒子少量
4　暗褐色土　　黄白色粒子を薄く層状に2～3層はさむ
5　黄白色土　　地山の崩落土
6　暗褐色土　　黄褐色・黄白色ブロック少量
7　明黄褐色土　黄白色ブロック多量

第73図　中世土壙

4．その他の遺構

（1） 土壙（第74図）

第２号土壙

Ｂ－２・Ｂ－３グリッドに位置する。平面形は長楕円形である。長軸3.2ｍ、短軸1.0ｍ、深さ30cmを測る。

第３号土壙

Ａ－４・Ｂ－４グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸1.8ｍ、短軸1.0ｍ、深さ24cmを測る。

第４号土壙

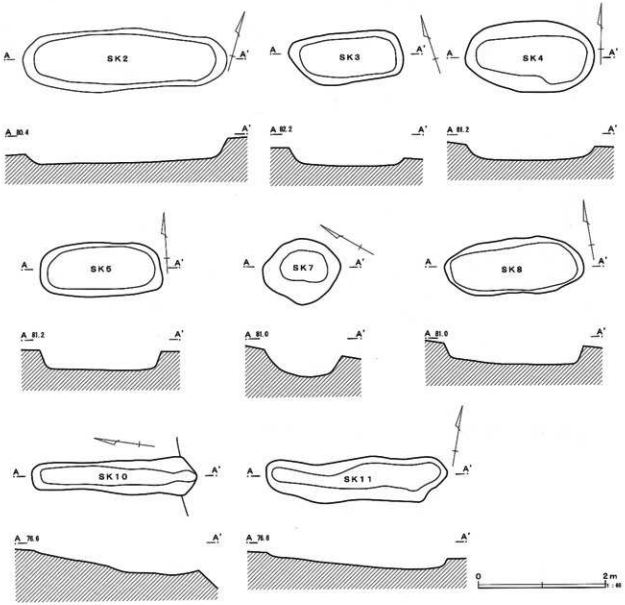
Ｂ－４グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸2.0ｍ、短軸1.1ｍ、深さ25cmを測る。

第５号土壙

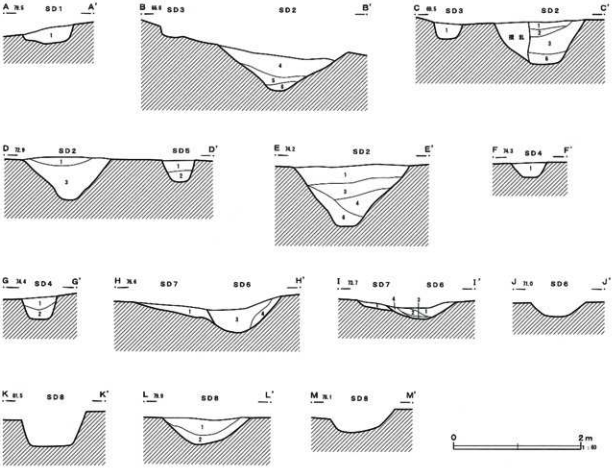
Ｂ－４グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸1.9ｍ、短軸0.8ｍ、深さ30cmを測る。

第７号土壙

Ａ－６グリッドに位置する。平面形は不整円形である。長軸1.2ｍ、短軸1.0ｍ、深さ40cmを測る。



第74図　土壙



第1号溝跡
1　暗褐色土　焼土粒子・炭化物少量　地山粒子多量

第2号溝跡
1　暗褐色土　黄白色粒子少量
2　暗褐色土　黄白色ブロック・黄白色粒子多量
3　暗褐色土　黄白色粒子少量
4　暗褐色土　黄白色粒子多量　やや明るい黄白色ブロック含む
5　暗褐色土　6層よりやや暗い
6　暗褐色土　黄白色粒子多量　黄白色ブロックを含む

第3号溝跡
1　暗褐色土　黄白色粒子多量

第4・5号溝跡
1　暗褐色土　黄白色粒子少量
2　暗褐色土　1層より暗く　黄白色粒子少量

第6号溝跡
1　暗褐色土　地山粒子少量
2　暗褐色土　地山粒子多量　地山ブロック少量
3　暗褐色土　地山粒子少量
4　暗黄褐色土　粗い地山粒子少量

第7号溝跡
1　暗褐色土　地山粒子少量

第8号溝跡
1　暗褐色土　炭化物少量
2　褐色土　炭化物少量

第75図　溝跡土層断面図

第8号土壙

B－5グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸2.2m、短軸0.8m、深さ25cmを測る。

第10号土壙

C－8グリッドに位置する。直線的に溝状にのびる。長さ2.6m、幅0.6m、深さ9cmを測る。

第11号土壙

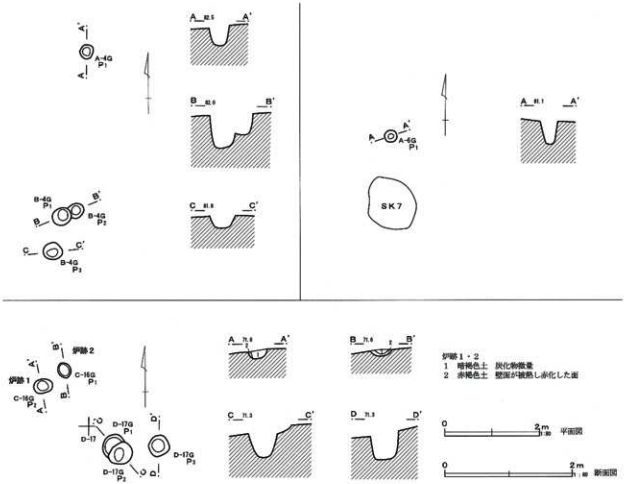
C－8グリッドに位置する。不定形で溝状にのびる。長さ2.9m、幅0.7m、深さ15cmを測る。

（2）　溝跡（第6・7・75図）

第1号溝跡

C－3グリッドに位置する。全長7.1m、幅0.9m、深さ30cmを測る。

第3・4・5号溝跡



第76図 ピット（1）

東区中央を南北にのびて、北側でほぼ直角に折れて東側に伸びる溝で、発掘調査時には便宜上個別に遺構名をつけたが、同一の溝跡である。幅0.7m、深さ30～40cmを測る。現代の地割と一致することから、古くても近世以降に構築された区画溝と推定される。

第6・7号溝跡

西区の調査区のほぼ中央を南北にのびて、尾根頂部の保存緑地の手前でとぎれる。断面の土層観察から新旧2回の掘り返しがみられ、新たな掘り返し溝をＳＤ６とした。両溝あわせた幅が2.0～2.3m、深さ1.0mを測る。現在の地割と一致しており、ＳＤ８とともに西側の桑畑を区画した近世以降の溝跡とおもわれる。

第8号溝跡

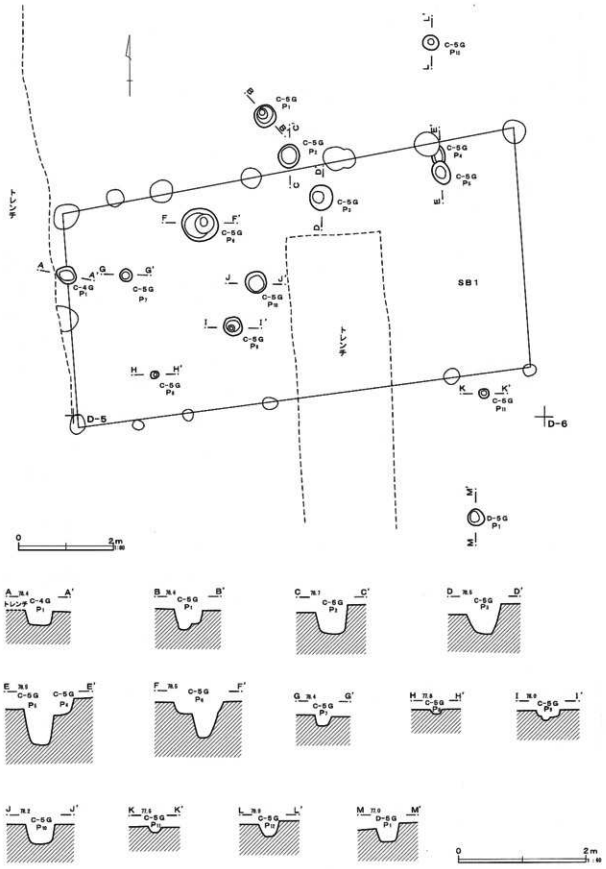
西区の道跡にそってのびる。全長21m、幅1.1m、深さ40cmを測る。近世以降の区画溝である。

（3） ピット・炉跡（第76・77図）

時期不明のピットは、22基検出された。Ａ－４・Ｂ－４グリッドでは４基が検出された。この付近は木株の下から縄文時代の石器が多量に出土したため、縄文時代の遺構の存在を予想したが、遺構は検出されず、ピットも縄文時代のものと断定するにいたらなかった。

西区中央からは14基のピットが検出された（第77図）。ＳＢ１と重なるように分布しており、覆土の状況もＳＢ１と大きな違いがみられないが、出土遺物もなく、時期を断定するまでにはいたらなかった。

東区では２ヶ所の炉跡とともに３基のピットが検出された。住居跡の痕跡だった可能性もある。



第77図　ピット (2)

V 発掘の成果と諸課題

1．各時代の遺構について

各時代における谷ツ遺跡の位置付けと遺構の特質について、時代順にまとめることにする。

縄文時代

まず、縄文時代では、勝坂式期の住居跡1軒と加曽利E式期の住居跡2軒が検出された。この他、出土遺物では中期の土器を中心として、諸磯b式、諸磯c式、阿玉台式、勝坂式、加曽利EⅡ～Ⅲ式の各種土器がわずかながら出土している。ここでは、谷ツ遺跡と周辺部の北比企丘陵の縄文遺跡について、遺跡の立地の観点から概観する。

表1は周辺部の丘陵地帯の縄文遺跡について、出土土器と検出遺構をしめしたものである。出土土器については、調査報告書に掲載された遺物で所属時期の判別できるものを点数として数えたものである。点数の比率が各時期の実態をそのまま反映しないことはいうまでもないが、各時期のおおまかな傾向はつかめるものと思われる。ここに掲げた遺跡は、越畑城跡（小野・小野他1979）、滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群の15遺跡（植木1997）、嵐山工業団地関係で調査された6遺跡（川口1992）（佐藤1994）、およびインターチェンジアクセス道路関係の3遺跡（金子・昼間2001）の計25遺跡である。いずれの遺跡も遺跡範囲内の半分以上または大半が調査されたもので、市野川左岸・粕川・滑川流域の丘陵地帯の傾向をつかむことができる。

まず、縄文早期では前葉から中葉にかけては出土頻度が少ないものの、前期後葉の条痕文系土器を出土する遺跡が多い傾向がみられ、この時期を第一のピークとすることができる。亥遺跡では、条痕文期の炉穴が10基検出されている。炉穴群は丘陵の斜面部にいくつかのまとまりをもちながら分布しており、この時期に特徴的な遺構のありかたを示している（第78図1）。用土庵B遺跡では、丘陵頂部からはまったく遺物が出土しないのに対し、丘陵肩部から南斜面に集中して多くの条痕文土器が出土しており、明確な条痕文期の遺構はないものの、土器の出土傾向は本来あったであろう遺構の分布状況を反映しているものと思われる（植木1997）。

隣接する市野川右岸流域や兜川・槻川流域の山間部においても、早期の土器を出土する遺跡はみられ、なかでも早期末葉の遺跡が比較的多いことは共通する。この時期の遺跡の立地をみてみると、台地部や河岸段丘の平坦面に立地する遺跡がある一方で、山間部の丘陵斜面に立地する遺跡も多く目立つのが特徴である。

卯月畑遺跡は槻川支流からさらに奥地の山間部にある遺跡で、丘陵の東南斜面に田戸下層式期から条痕文期にかけての炉穴8基が展開する（第78図2）。神名沢B遺跡は沖積地に面した丘陵上にあり、丘陵裾部との比高差約45mを測る高所の遺跡である。ここでは南斜面に条痕文期の住居跡1軒が検出されている（小川町1999）。

次の前期では、諸磯b式期を中心とする前期後葉が第二のピークとなり、報告書に掲載される遺物の点数も多くなる。この時期には、丘陵上の尾根線にそって小規模な遺構が展開する。尺尻遺跡では、幅の狭い尾根線近くの斜面に諸磯b式期の住居跡1軒と集石2基が立地する（第78図3）。同様に尺尻北遺跡でも、尾根線上の斜面に諸磯c式期の住居跡1軒と、近接して諸磯式期の土壙2基が点在している（第78図4）。新田坊遺跡、芳沼入遺跡でも、長い尾根線上一帯や尾根線頂部から諸磯b式が多数出土しており、前期後葉の遺跡のあり方として、同様の傾向をうかがうことができる。

また、北比企丘陵一帯には前期前葉の遺跡が非常に少ないことも注意すべき点である。関山・黒浜・諸磯a式土器を出土する遺跡は極めて少なく、早期末葉と前期後葉の諸磯b式・諸磯c式期の2つのピ

遺跡名	出土土器												検出遺構							遺構の時期
	早期			前期					中期			後期								
	前葉	中葉	末葉	初頭	前葉	後葉	末葉	前半	後半	初頭	前葉	計	炉穴	集石	土壙	埋甕	埋甕炉	住居跡	ピット群	
越畑城跡	5	7	4	4			16	3	4			43								
柳沢A			2				2	3	6			13								
台田頭A			6	4		3		5	11	2		31							*1	*条痕文期
二ッ沼南		3	6	5			96	14	6	2		132		1			*1			*加曽利E Ⅲ式期
柳沢B							10	1	4	1		16		1	*5	*1				*加曽利E Ⅰ式期
中西							33	5	6			44		*5						*うろ1 基が勝坂式期
玄			5	3			80	51	13			152	*10	6						*条痕文期
天裏							18	2	12	1		33		1		*1				*加曽利E Ⅲ式期
用土竜A			3				7	3	3	2		18								
用土竜B	4		49	2			10		1	1		67		1						
西裏												0		2						
中尾							9		4			13		1						
鶴沼東			1				4	1	11			17		1		*2				*加曽利E Ⅱ式期
年中坂B			5			3	17	22	9			56		8	*1					*加曽利E Ⅱ式期
鶴沢		1	92	2			45	3	29			172		2						
年中坂A	2	1	20		3	5			10	5	2	48		2						
大野田西		4	8				36	6	4			58								
芳沼入		2	3	3	3	104	6	18				139			*1					*前期末葉
新田坊			10			81	1	1				93		1	*1					*諸磯e式期
尺尻				1		60	2	2	5			79		*2				*1		*諸磯b式期
尺尻北						71	1	3				75			*2			*1		*諸磯e式期
大野田		3	15	1		7					4	30								
大木前	1		3			14						18	1							
小梁北		1	9	2	4	90			36			142	5		18			*1		*加曽利E Ⅰ式期
小梁			2									2								
総計	13	21	243	27	13	827	16	142	169	14	6	1491	16	34	28	4	1	3	1	

表1　市野川左岸流域の丘陵遺跡

A 市野川左岸流域

遺跡名	出土土器
越畑城跡	押型文・三戸・田戸下層・条痕文・花積下層・諸磯a・b・c・浮島・勝坂・加曽利E Ⅰ
柳沢A	条痕文・諸磯b・勝坂・加曽利E Ⅱ
台田頭A	条痕文・花積下層・諸磯b・勝坂・加曽利E Ⅱ・称名寺
二ッ沼南	田戸下層・条痕文・花積下層・諸磯b・c・浮島・興津・勝坂・加曽利E Ⅱ・Ⅲ・称名寺
柳沢B	諸磯b・c・阿玉台・加曽利E Ⅰ・称名寺
中西	条痕文・諸磯b・c・勝坂・加曽利E
玄	条痕文・花積下層・諸磯b・c・浮島・阿玉台・勝坂・加曽利E・堀利
天裏	諸磯a・b・c・加曽利E Ⅱ・称名寺
用土竜A	条痕文・諸磯b
用土竜B	撚糸文・野島・鵜ヶ島台・条痕文・花積下層・諸磯b
中尾	諸磯・加曽利E Ⅱ
鶴沼東	条痕文・諸磯c・十三菩提・勝坂・加曽利E Ⅰ・Ⅱ
年中坂B	条痕文・関山・諸磯b・五領ヶ台・加曽利E
鶴沢	鵜ヶ島台・花積下層・諸磯b・c・興津・阿玉台・加曽利E Ⅱ
年中坂A	撚糸文・条痕文・花積下層・諸磯b・加曽利E・称名寺・堀之内
大野田西	沈線文・条痕文・諸磯a・b・c・興津・十三菩提・五領ヶ台
芳沼入	沈線文・条痕文・花積下層・黒浜・諸磯b・c・浮島・十三菩提・五領ヶ台・阿玉台
新田坊	条痕文・諸磯b・c・浮島・阿玉台
尺尻	黒浜・諸磯b・c・十三菩提・勝坂・加曽利E
尺尻北	諸磯b・c・勝坂
大野田	沈線文・綾条所在波文・条痕文・茅山上層・諸磯b・c・堀之内
大木前	押型文・野島・条痕文・諸磯b・c
小梁北	撚糸文・条痕文・花積下層・黒浜・諸磯a・b・加曽利E Ⅰ・Ⅱ
小梁	条痕文
谷ツ	諸磯a・b・阿玉台・勝坂・加曽利E

B 市野川右岸流域の遺跡

遺跡名	出土土器
日向遺跡	諸磯a・井戸尻・阿玉台・加曽利E Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
中井遺跡	諸磯a
宮子遺跡	井戸尻・加曽利E Ⅰ
蟹山遺跡	加曽利E Ⅲ
越梨遺跡	条痕文・井戸尻・加曽利E
峰原遺跡	加曽利E Ⅰ
台ノ前遺跡	諸磯a・井戸尻・阿玉台・加曽利E Ⅰ・Ⅱ
岡原遺跡	諸磯a・加曽利E Ⅱ
町場遺跡	条痕文・諸磯b・勝内・井戸尻・阿玉台・加曽利E Ⅰ・Ⅲ・称名寺
日丸遺跡	鵜ヶ島台・諸磯a・加曽利E Ⅰ・Ⅱ
北蟹山遺跡	条痕文・諸磯c・勝坂・阿玉台・加曽利E
中谷津遺跡	加曽利E Ⅲ
悪戸遺跡	諸磯c
本宿前遺跡	加曽利E Ⅱ
下原遺北遺跡	井戸尻・加曽利E Ⅰ

※（小川町 1999）より

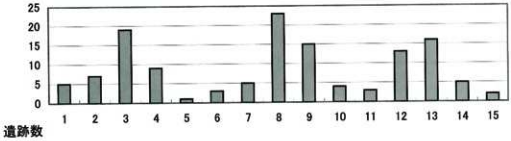
C 児玉・規川流域の遺跡

遺跡名	出土土器
広見西遺跡	条痕文・黒浜
宮山遺跡	黒浜・加曽利E Ⅰ
日附田遺跡	鵜ヶ島台・諸磯a・加曽利E Ⅱ
寺崎A遺跡	加曽利E Ⅲ
八幡台遺跡	二ツ木・関山・木島・黒浜・諸磯a・b・c・興津・加曽利E・Ⅰ・Ⅱ
蛭坂遺跡	鵜ヶ島台・諸磯a・加曽利E
川向遺跡	鵜ヶ島台・諸磯a
平松台遺跡	野島・鵜ヶ島台・茅山下層・上層・入海・関山・黒浜・釈迦堂・諸磯a・b・c・勝内・井戸尻・阿玉台Ⅰ・加曽利E Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・曽利
西浦遺跡	条痕文・諸磯a・加曽利E Ⅱ
太田A遺跡	鵜ヶ島台・諸磯a
番場遺跡	二ツ木・黒浜・諸磯a・b・勝内・阿玉台・加曽利E Ⅱ
大豆五駄遺跡	鵜ヶ島台・加曽利E Ⅱ
別所遺跡	黒浜・加曽利E Ⅲ
塚場遺跡	加曽利E Ⅰ・Ⅱ
天神台遺跡	竹管文・加曽利E Ⅳ
笠郷遺跡	黒浜・諸磯a・b・c
山際遺跡	加曽利E Ⅰ
寺崎B遺跡	諸磯a・加曽利E Ⅲ
花ノ木遺跡	加曽利E Ⅲ
谷上遺跡	黒浜・諸磯a・加曽利E Ⅰ・Ⅱ
清水遺跡	加曽利E Ⅰ
越場遺跡	押型文・浅鉢文・条痕文・関山・黒浜・諸磯a・b・c十三菩提
神名沢B遺跡	田戸下層・鵜ヶ島台・茅山・関山・諸磯a・b・浮島・勝坂・加曽利E Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
大平遺跡	鵜ヶ島台・打越・諸磯b・c
細谷遺跡	田戸下層・諸磯b・c・勝坂・阿玉台・加曽利E
耶月堀遺跡	田戸下層・条痕文

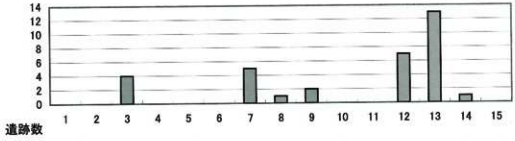
※（小川町 1999）より

表2　各地域の縄文遺跡

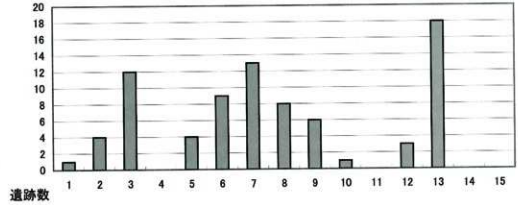
A 市野川左岸流域



B 市野川右岸流域

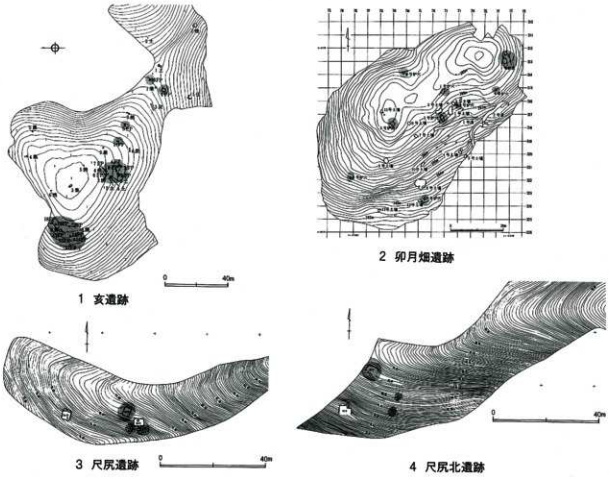


C 兜川・槻川流域



1 早期前葉　2 早期中葉　3 早期後葉　4 花積下層　5 関山　6 黒浜　7 諸磯 a　8 諸磯 b
9 諸磯 c　10十三菩提　11五領ヶ台　12勝坂・阿玉台　13加曽利 E　14称名寺　15堀之内

表 3　各地域の遺跡の推移



第78図　丘陵地の縄文遺跡

ークの間にあって退潮期である。転じて、兜川・槻川流域の山間部ではこの時期の遺跡が比較的多く点在する。なかでも平松台遺跡、八幡台遺跡、山根遺跡などは、河岸段丘や河川に面した台地の平坦面に立地し、複数の住居跡をともなう集落が営まれる。これらの遺跡では、諸磯式期以降も集落が継続しており、前期を通じて安定的な拠点集落だったことを示唆している。これらの継続的な集落を中心として一型式期だけの単発的な遺跡もふくめて比較的多くの遺跡が分布することから、兜川・槻川流域の山間部が前期前葉、特に黒浜・諸磯式期を通じての安定的な居住領域だったことがわかる。一方、市野川右岸流域では関山・黒浜式の遺跡は現時点ではほとんどみられず、次の諸磯a式期以降に遺跡が突如として現れる。さらに繰り返しになるが、市野川左岸流域の丘陵部では一型式遅れて諸磯b式からc式期にかけて遺跡の増加が起こる。このように、兜川・槻川流域と市野川右岸流域、市野川左岸流域の丘陵地帯の三つの地域の遺跡動態を縄文前期を通じてみた場合、西の山間部から東の丘陵地帯へとしだいに居住領域を拡大していったことを示唆している。

次に中期の市野川左岸流域の丘陵遺跡についてみることにする。

中期の遺跡が最も多くなることは一般的な傾向と同様であり、この時期が第三のピークとなる。二ツ沼南遺跡、柳沢B遺跡、天裏遺跡、細沼東遺跡、年中坂B遺跡では、加曽利E式期の埋甕や埋甕炉が検出されており、住居跡の存在を想定させるものである。尾根頂部の平坦面や肩部に立地する傾向があり、ごく少数の住居跡に土壙や集石がともなう小規模な

集落または居住域を想定できる。谷ツ遺跡においても遺構の立地は同じ傾向であり、加曽利E式期には尾根頂部の平坦面や肩部に2～3軒の小規模な集落が展開していたものと思われる。また、今回谷ツ遺跡で検出されたSJ29は、勝坂期で斜面中腹にあり、この時期の遺構のあり方としては例外的といえる。

市野川右岸流域や兜川・槻川流域でも、同様に中期の遺跡が多くなる。なかでも八幡台遺跡、平松台遺跡、行司免遺跡などの安定的な拠点集落が、引き続き槻川流域の河岸段丘や台地上の平坦部に占地する。こうした兜川・槻川流域と市野川左岸流域の丘陵地帯の遺跡のあり方は、核となる中心地域とその周縁の居住領域という関係を示している。

後期以降は遺跡数が激減し、堀之内式土器が出土する遺跡を最後に、丘陵上に遺跡はまったくみられなくなる。この地域に遺跡が戻ってくるのは、弥生時代後期である。

以上、谷ツ遺跡の立地する市野川左岸流域の丘陵地帯を中心に、近接する市野川右岸流域、兜川・槻川流域の遺跡との対比から、各時期の遺跡の立地の特徴と各地域の遺跡の動態について概観した。第一のピークとなる早期後葉の遺跡数の増加は、比企地域全域に共通しており、台地部だけでなく山間部や丘陵地帯の斜面に多く立地する傾向がみられる。

前期前葉には兜川・槻川流域で安定的で継続的な集落が形成されるが、諸磯a式期以降の前期後葉にはさらに周辺地域への集落の分散化傾向がおこり、市野川左岸流域の丘陵地帯では諸磯b式期に遺跡数が第二のピークとなる。この時期の丘陵遺跡では、尾根線上に小規模な遺構が占地するのが特徴である。

前期を通じてのこうした遺跡動態については、関山・黒浜式期の中核地域である兜川・槻川流域からの居住領域の拡大がまず思い浮かぶ。しかし、旧入間川流域の河岸段丘や大宮台地などの他地域の遺跡動態との関係も視野に入れた場合、その背景は単純ではない。少なくとも兜川・槻川流域の山間部が関山・黒浜式期以降中期末までの間、安定的で継続的な居住領域であったのに対して市野川流域の丘陵地はその周縁部の居住領域だったといえる。また、市野川右岸流域には、山間部から東にのびる低丘陵部や河川の沖積地に面した比較的広い台地部の平坦面が発達しており、流域にそって連綿と遺跡が分布している。今後この地域での調査が進むなかで、さらに立ち入った検討を加えることができるだろう。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構では、調査区全体で住居跡31軒、掘立柱建物跡1棟、土壙1基が検出された。住居跡については出土土器により、8世紀前葉から10世紀後半までの年代が与えられており、この間に数回にわたる集落変遷があったとかんがえられる。出土土器の検討や集落変遷については次節以降で詳しく述べるため、ここでは調査所見に絡むいくつかの点について触れることにする。

まず、奈良・平安時代における谷ツ遺跡の集落範囲についてである。検出された住居跡は、西区で25軒、東区で6軒である。西区と東区との間には、南北約50m、東西約40mの調査対象外区域がある。この区域は事前の試掘の結果、調査区域から外れた部分である。試掘の際、南北方向に数本のトレンチを入れたが、竹の根の攪乱と土砂流出が著しく、遺構の存在は確認できなかった。しかし、西区と東区の住居跡の分布を概観する限り、この調査対象外区域にも、本来は奈良・平安時代の住居跡が分布していたと想定できる。当時の集落範囲は、西区のSJ1・9を西限とし、東限は東区からさらにのびた尾根末端部の平坦面から南斜面におよんでいたとかんがえられる（第79図）。

次に、奈良・平安時代における谷ツ遺跡の立地の特徴についてである。住居跡の占地を地形別にみると、尾根線上の平坦面に3軒、南斜面に28軒となって、圧倒的に斜面上に占地するものが多い。住居跡が丘陵斜面に占地する遺跡は、滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群や嵐山工業団地関係の多くの遺跡に共通しており、この地域における奈良・平安時代の集落

の特徴である。中でも、住居跡が10軒以上検出された天裏遺跡、柳沢A遺跡、柳沢B遺跡、嵐山町蟹沢遺跡、新田坊遺跡、大木前遺跡などは、谷ツ遺跡と同じく、奈良・平安時代を通じて継続的に営まれた集落とかんがえられる。これらの集落は滑川・粕川流域の丘陵地帯にあって、一定の間隔をもって位置し、各河川からのびるやや幅広い支谷に対応する形で立地している。こうした状況は、当時の景観として各支谷ごとに中心となる集落が営まれていたことをしめしている。しかも、支谷に面した丘陵部ならどこでもよいかというとそうでもない。上記7遺跡に共通するのは、住居跡の分布する東斜面または南斜面、あるいはその両方に面して比較的幅広い沖積地や支谷が広がっていることである。特に谷ツ遺跡、大木前遺跡、天裏遺跡は、広い支谷が遺跡の東から南にまわりこみ、この支谷の入り口部分の丘陵上に位置する。こうした状況は、丘陵開発の集落でありながらも、谷部の生産基盤との密接な関係を反映している。

最後に、カマドに片岩が使用された住居跡についてである。今回の調査で、片岩がカマドの補強材、もしくは構築物の一部として使用された住居跡は13軒あり、全体の約4割に及んだ。13軒の内訳をみると、①カマドの前方部で直立した2点の片岩の上に、もう1点が橋状にかかるもの（ＳＪ19）、②カマド内壁に貼りついた状態で片岩が検出されたもの（ＳＪ17・18・24）、③カマド内もしくはカマドの前方部に片岩が散在していたもの（ＳＪ１・６・10・27・28・32・33）④カマドからは検出されず、床面上で片岩が検出されたもの（ＳＪ12・21）、などに分けられる。

①は、ＳＪ19の1例のみで、カマドの袖部が本来は壁面のラインから張り出してあったものとおもわれ、カマド正面の焚口部分の構築材として片岩が使用されている例である。ＳＪ19の片岩を取り除いた掘り方をみると、さらに内壁にも片岩が使われていた可能性がある（第50図）。

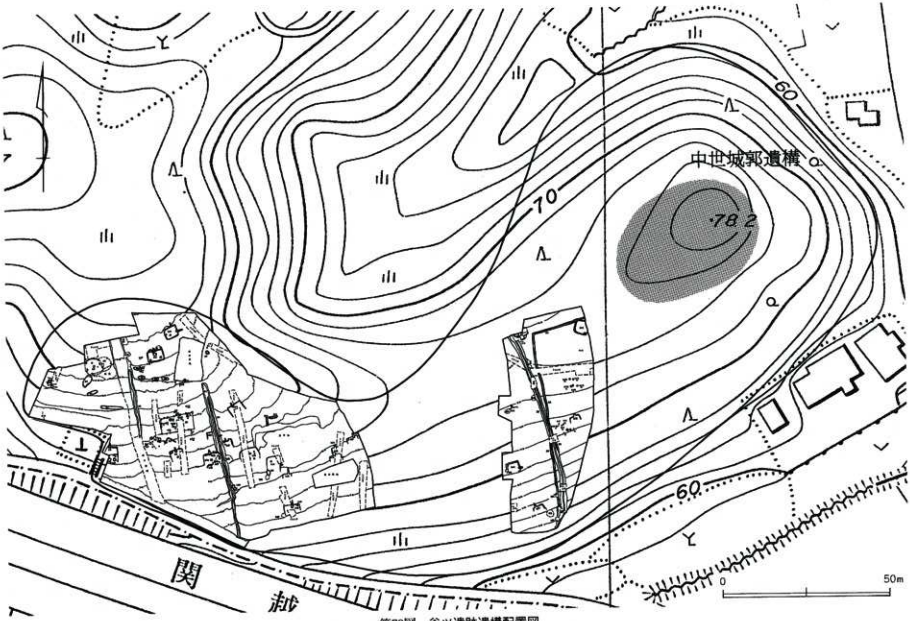
②は、いずれも住居の壁面から外側に出た袖口部分のカマド内壁に貼りついて検出されたもので、ＳＪ17・24は片側から、ＳＪ18では両側に1点ずつ対になっていた。他にもカマド前方部や、床面上から数点の被熱して表面の赤化した片岩が散在しており、本来はこれ以外にも複数の片岩を使用してカマドを構築していたことをうかがわせている。ＳＪ24では、カマド正面の焚口部とおもわれる部分が橋状に焼土化して残っていたことから、カマド天井部の構築には片岩を使用せず、粘土材を用いていた可能性が高い（第44・47・55図）。

③は、カマド使用時の状態をとどめずに片岩が散在したものと考えられるが、ＳＪ27とＳＪ33の場合、いずれもカマド中央部に細長い片岩が直立した状態で、支脚とおもわれる（第60・67図）。その他のものは被熱赤化した板状の片岩がカマド内から前方部に散在していて、ほとんどがカマド内壁の補強材として使用されたものとおもわれる。ＳＪ10ではカマド底面の内壁沿いに片岩を埋めこんだとおもわれる細い溝状の掘り方があることから、片岩が内壁全体に貼りついていたのだろう（第33図）。

④についても、直接カマドから検出されていないが、片岩は被熱赤化していて、本来はカマドに使用されたものが床面に散在したものだろう。

これらの片岩は、すべて緑泥片岩もしくは雲母片岩などの結晶片岩であり、谷ツ遺跡から最も近いところでは、槻川流域の小川町下里地区から産出される。片岩をカマドに用いた遺跡の調査例は、当然ながら結晶片岩を産出する周辺地域に多い。下里地区の産出地を由来とする遺跡は、槻川流域や小川盆地を中心に多く、さらに北比企丘陵の粕川・滑川流域まで広がっていて、滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群や嵐山工業団地関係の遺跡群にもみられる。

谷ツ遺跡のカマドに類似するケースをいくつかあげてみると、滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群の天裏遺跡第28号住居跡は8世紀後半とかんがえられ、カマドに緑泥片岩が橋状にかかる。両袖は失われてい



第79図　谷ツ遺跡遺構配置図

たが、壁際で地山を掘り残した袖部が確認されていることから、片岩を橋状にささえた袖部は地山の掘り残し土だったことがわかる（植本1997）。袖部に片岩を使用しないものの、谷ツ遺跡ＳＪ19の類似例といえる。小川町の耕地遺跡第７号住居跡は７世紀後半から８世紀前半のもので、カマドの両側の内壁に片岩が貼りつき、その上に片岩が橋状にかかる（上野1998）。片岩がカマド焚口部の構築物として残存した例である。寄居町の樋ノ下遺跡第14号住居跡は、９世紀前半から10世紀初頭の時期を与えられている。カマドはほぼ廃絶時の状態で検出され、石材は両袖口に対になっていて、焚口部の天井石がカマド前面に落下していた。焚口から後方の天井部は地山掘り残しによるもので、焚口部だけに石材が使用されている例である（細田・岩田1994）。

谷ツ遺跡ＳＪ19のカマドは、本来は樋ノ下遺跡例のように、焚口部の構築にだけ片岩を使用し、後方の天井部は地山掘り残し、または粘土材によるものだったとおもわれる。また、谷ツ遺跡のその他のカマドでは、ＳＪ24の焚口天井部が粘土によるものだったり、ＳＪ10の内壁全体に片岩をはりめぐらすものだったりと、石材の使用のしかたは一様ではなかっただろう。天裏遺跡例で焚口天井部だけに石材を使用していたように、上部施設のすべてに石材を使用したものではなく、カマドの一部にだけ補強材または構築部材として使用したものが多かったのではないだろうか。②としたもののなかには、本来ＳＪ19と同様のカマドか、あるいは内壁にだけ片岩を補強するカマドだったか、二通りの可能性をかんがえることができる。いずれにせよ、一遺跡内でのカマドの石材使用のあり方は、産出地から集落への当時の石材入手の状況を反映している。

なお、住居跡から出土した片岩については、第Ⅳ章第２節の最後に石材観察表を掲載したので参照されたい（63～64ページ）。

中世―「谷ツ城跡」について

今回の調査の成果のひとつに、中世城郭にともなう堀跡が発見されたことがあげられる。ＳＤ２は、東区中央部を南北にのびる溝跡で、谷ツ遺跡がのる丘陵の尾根線上と南北両斜面を直交する形に構築される。遺構の時期をしめす遺物は出土しなかったが、溝の配置と断面形から中世の薬研堀が想定された。

この溝跡の位置付けについて、県立歴史資料館館長の梅沢太久夫氏に実見を依頼し、その際に周辺部の踏査が行なわれた。梅沢氏による踏査の結果、調査区から東にのびる尾根先端部に平場と土塁状遺構などが確認され、中世城郭遺構を発見するにいたった。今回調査された溝跡は、西側の尾根筋から先端部にある城郭部分への敵の侵入に備えるための防御線として機能した遺構であり、中世城郭遺構にともなう堀切であるとかんがえられる。

今回発見された城郭遺構については、第４節に梅沢氏による遺構図（第93図）と遺構観察所見とを掲載した。この所見から確認できるのは、二ヶ所の平場遺構とこれらを画する土塁状遺構、および段築などによって構成される比較的小規模な城郭遺構である。遺構が配置されるのは、尾根先端部の高台部分から一部南斜面にかけての比較的狭い範囲であり、無遺構部分を挟んで西の境に堀切を１条設け、全体として簡素なつくりといえる。

今回発見された谷ツ遺跡の城郭遺構について、ここでは「谷ツ城跡」と仮称し、最も近い距離にある杉山城跡との関係について触れておく。杉山城跡は「谷ツ城跡」から丘陵をひとつ挟んだ南方約600ｍのところにある。この城跡は戦国時代の後北条氏の城といわれ、天文末―永禄初期（1550年頃～1560年代前半）に機能していたとかんがえられている（柳田・梅沢1979）（村田・関口1987）。

今回発見された「谷ツ城跡」は、杉山城跡に最も近い位置にあることから、この城跡と何らかの関係にある可能性が高い。その場合の可能性として、①杉山城の周囲に配された砦跡、②杉山城の攻めの際に構築された陣城、の２つがかんがえられる。

①がかんがえられる根拠としては、まず杉山城跡

との位置関係があげられる。杉山城跡の搦め手は北西にのびる尾根筋にある。杉山城跡の西側から南側にかけては急斜面と竪堀、腰曲輪を配して堅固な備えがあるのに対し、搦め手のある北側は比較的緩斜面が広がっていて、守りが薄い。これを補うために杉山城跡の北方に砦を築いたというかんがえである。粕川沿いを南下して谷筋から杉山城の搦め手に迫ろうとする敵方に対し、谷の入り口で牽制できる。

しかし、これに対しては次のような否定的な見方ができる。杉山城は自然の要害を最大限に利用し、かつ数多くの築城技法が巧みに取り入れられた城と指摘されている（柳田・梅沢1979）。敵方と対峙するうえでは、攻撃よりも城を守備することによって最大限の力を発揮できる。味方の兵力を周囲の砦に分散させるよりも、杉山城に集中させて城の防御性を最大限に生かして戦おうとしたのではないか。

もうひとつの否定的な見方は、「谷ツ城跡」の特徴からあげることができる。「谷ツ城跡」は、すでに触れたように全体として簡素なつくりであり、虎口や竪堀などの防御施設が見られず、守備を重視した城郭とはかんがえられない。防御施設のあり方は、杉山城の複雑多様なそれとくらべて、あまりにも対照的である。また、「谷ツ城跡」の狭い縄張りは、杉山城の搦め手から迫る敵方を牽制するための、充分な部隊を配するには、あまりに手狭である。

②については、「谷ツ城跡」の構造自体にその根拠を求めることができる。「谷ツ城跡」は、西側の尾根筋から堀切、平場、土塁状遺構、そして次の平場の順に組み合わさり、西側の尾根筋に対しての防御が考慮されている。さらに南側斜面にも二段の段築か、または段築と横堀の組み合わせとなる。このように西側にのびる尾根筋と南斜面への備えは、まさに杉山城に向かって考慮されたものとかんがえられる。さらに全体の簡素なつくりは、常時機能していた守備重視の城郭ではなく、むしろ臨時的な施設だったことをうかがわせる。

以上のように、「谷ツ城跡」は杉山城の城攻めの際に、構築された攻め手側の陣城だった可能性が高い。杉山城を攻める際に、比較的攻めやすい搦め手側に攻め手の兵を展開させたとすれば、攻め手の最も後方に位置するのが「谷ツ城跡」であり、陣城を構えるのに最も適した場所といえる。

戦国時代における比較的規模の大きな城館跡の周囲には、早期警戒的な守備側の砦跡や、逆に城攻めがおこなわれた際の攻め手側が構えた陣城などの拠点が、遺跡として分布する可能性が充分考慮されるべきである。「谷ツ城跡」は杉山城跡の周辺の尾根先端部から偶然発見されたものである。地形図をみると、立地する尾根先端部は連なる尾根筋から若干標高が上がり、高台のようになる（第79図）。杉山城跡の周囲には、このような地形が他にも数ヶ所みられるため、注意を喚起したい。　（君島勝秀）

引用・参考文献

植木智子　1997　「滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群」滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群発掘調査会

上野真由美　1998　「耕地遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第204集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

小野義信・小野美代子他　1979　「越畑城跡」埼玉県遺跡発掘調査報告書第20集　埼玉県教育委員会

小川町　1999　「小川町の歴史　資料編1」

川口　潤　1992　「蟹沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊・尺尻・尺尻北・大野田」埼玉県埋蔵文化財調査事業団

佐藤康二　1994　「大野田西遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第138集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

細田　勝・岩田明広　1994　「碾ノ下遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

村田修三・関口和也他　1987　「図説中世城郭事典第1巻 北海道 東北 関東」新人物往来社

柳田敏司・梅沢太久夫　1979　「日本城郭大系　第5巻　埼玉・東京」新人物往来社

金子直行・昼間孝志　2001　「大木前/小栗北／小栗／日向」埼玉県埋蔵文化財調査事業団

2．谷ツ遺跡と粕川流域の集落変遷について

谷ツ遺跡の発掘調査で検出した住居跡の変遷と、粕川に流れ込む小支谷に８世紀前葉から９世紀前半にかけて形成された集落の変遷について推察していきたい。

（1）谷ツ遺跡から出土した土器

まず粕川沿いの集落の変遷を追う前に、谷ツ遺跡の住居跡から出土した土器について、簡単に記しておきたい。

谷ツ遺跡では、34軒の住居跡を検出した。うち奈良・平安時代に相当する住居跡が31軒あり、さらに遺物が出土した住居は18軒であった。なかでも時期を知りうる遺物を出土した住居跡は15軒であった。

この15軒の遺物を検討した結果、谷ツ遺跡の土器を第Ⅰ～Ⅵ期に分けることができた。以下、各時期の住居跡から出土した遺物を簡単に検討していきたい。取り扱える軒数が少数であるため新旧の遺物が混在する住居跡は、蓋然性の高い一方の時期に含め、住居跡から出土した一纏まりの遺物として、取り扱うこととした。

第Ⅰ期の土器（第80図）

第15号住居跡カマドより出土した第80図１は、長胴型の甕である。上半部のみ出土。胴部の器面は縦方向のヘラケズリ、口縁部はラッパ状に外反する。内面はヘラナデされている。

第Ⅰ期以前より継続するこの形態の甕が第Ⅱ期には見られないため第15号住居跡を第Ⅰ期とした。

第Ⅱ期の土器（第80図）

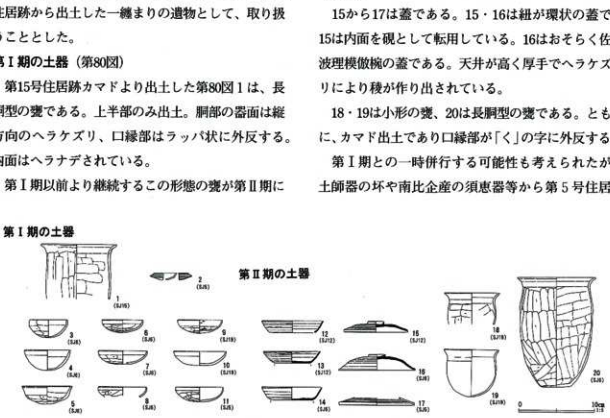
第５号住居跡から出土した第80図２は、いわゆる比企型坏で口縁部が外反する。内外面ともヘラナデされ、また外面と内面の上半部に赤彩が施されている。覆土中からの出土である。他の遺物との比較から、同住居に流れ込んだもので、第Ⅰ期に属するものであろう。

３～11は土師器の坏および椀である。３は外面口縁部横ナデ直下からヘラケズリ、内面はヘラナデされている。８・10は丸底の坏で口縁部横ナデ直下からヘラケズリされる。カマドから出土した。９はタール状物質が底面と口縁部付近に付着しており、灯明皿として使われた可能性がある。12～14は須恵器の坏である。口径が15cm程度、盤状で体部が逆ハの字に開き、底面は回転ヘラケズリといった特徴からいわゆる鳩山編年のＨＢⅡ期の坏Ａ（渡辺1990）と考えた。

15から17は蓋である。15・16は紐が環状の蓋で、15は内面を硯として転用している。16はおそらく佐波理模倣椀の蓋である。天井が高く厚手でヘラケズリにより稜が作り出されている。

18・19は小形の甕、20は長胴型の甕である。ともに、カマド出土であり口縁部が「く」の字に外反する。

第Ⅰ期との一時併行する可能性も考えられたが、土師器の坏や南比企産の須恵器等から第５号住居



第80図　第Ⅰ・Ⅱ期の住居跡出土土器

第Ⅲ期の土器

第Ⅳ期の土器

第Ⅴ期の土器

第Ⅵ期の土器

第81図　第Ⅲ－Ⅵ期の住居跡出土土器

跡・第６号住居跡・第12号住居跡・第19号住居跡を第Ⅱ期とした。

第Ⅲ期の土器（第81図）

第81図12は丸底のやや深い坏で椀に近い器形である。口縁部ヘラナデの直下からヘラケズリされる。

第17号住居跡からは１～11、13～29までの遺物が出土している。うち２・３・５・13・14・27・28は、覆土下層より出土した遺物であり、その他の遺物との多少の時期差を考えておきたい。いずれも口縁部ヘラナデの直下からヘラケズリされている。内面はヘラナデである。

16～21は南比企産須恵器坏である。16・17は器高が低く、底面の周辺回転ヘラケズリは幅広である。鳩山窯跡編年のＨＢⅡ期（渡辺1990）とすると、他の遺物とは一線を画する。18は内面底部に強く成形時の痕跡を残し、体部立ち上がりも中央部に膨らみがあり、口縁部に向かって薄くなる。

22・23は南比企産の須恵器蓋である。鈕部分は欠損しているが、器高の低い扁平な蓋である。

24は甕の底部。内面はナデの後叩き、外面は叩き痕をナデ消している。25は甑である。多孔の甑になると思われるが、底部を欠損する。共に南比企産である。

26～28は小型の甕である。26・27は台付甕の可能性がある。27・28は胎土・焼成が類似している。29は長胴甕の上半部である。口縁部はナデ、体部上半は斜方向、下部は横方向のヘラケズリ。内面はヘラナデされている。口縁部が「く」の字状に外反し、肩部近くに膨らみを持つ。

以上の特徴をもつ土器を第Ⅲ期とした。第８号住居跡・第17号住居跡の遺物が相当する。

第Ⅳ期の土器（第81図）

30～35は須恵器の坏である。底面調整は周辺回転ヘラケズリと回転糸切りが混在する。31はタール状の物質が附着、灯明皿であろう。36～38は須恵器椀である。36は末野産で焼成がやや甘い。37・38は薄手で丁寧な作り。39は南比企産須恵器蓋である。薄手で丁寧な作り、短頸壺もしくはコップ形土器の蓋と思われる。

40は土師器甕である。口縁部が「コ」の字に屈曲する直前段階のものである。41は甕底部である。薄手で胴部下半から直線的にすぼまり小さな底部に至る。

以上の特徴を持つ土器を第Ⅳ期とした。第４号・第18号・第24号住居跡の遺物が相当する。

第Ⅴ期の土器（第81図）

42～47は南比企産須恵器坏である。底部はいずれも回転糸切りされる。Ⅳ期より底径が小さくなり口径の１／２に近づく。48～50は椀で南比企産である。口縁部が外反し肥厚する。

51は灰釉椀である。田中広明氏より愛知県豊橋市二川窯跡群黒笹90窯型式との見解を受けた。内面はハケヌリされている。55・56は南比企産甕である。内面に叩き具痕を残す。外面にも一部叩きの痕跡が見られるがナデ消されている。

57～68は土師器甕である。口縁部が「コ」の字に屈曲するものが主流となる。いずれも外面はヘラケズリ、内面はヘラナデされている。

以上の特徴をもつ土器を第Ⅴ期とした。第１号・第10号・第27号・第31号住居跡の遺物が相当する。

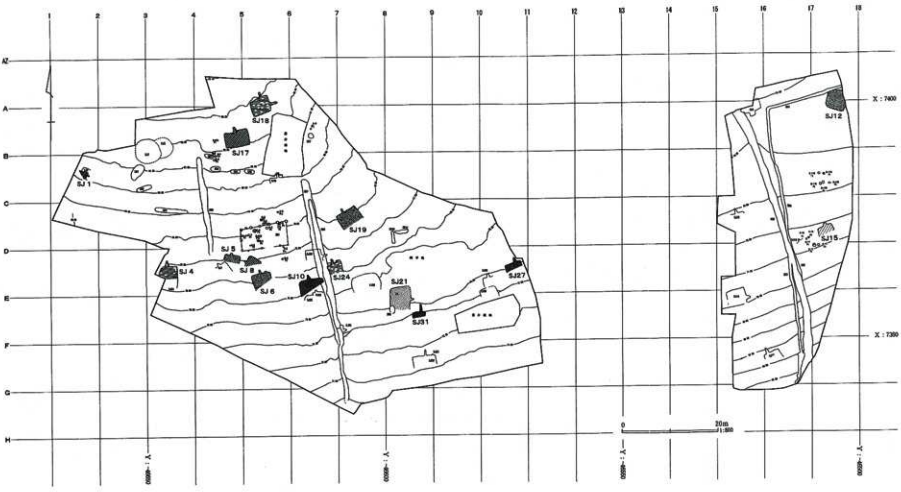
第Ⅵ期の土器（第81図）

69はロクロ整形による土師器の高台付椀である。内面の一部に煤状の付着物があり、内面黒色処理がなされた可能性がある。小型の坏と共伴している。これらの遺物から第21号住居跡を第Ⅵ期とした。

以上、各時期の主要なる遺物について記した。供膳具は、第Ⅲ期までは土師器が主流だったが、第Ⅳ期には須恵器坏に取って替わる。にもかかわらず第Ⅰ期～Ⅴ期を通じて煮沸具は大小とも土師器であり、貯蔵具は須恵器を用いている。

（２）谷ツ遺跡の住居跡の変遷

上記の遺物から検討した土器の変遷を参考、谷ツ遺跡の変遷を見ていきたい（第82図）。



第Ⅰ期（～8世紀前葉）　第Ⅱ期（8世紀前葉）　第Ⅲ期（8世紀後葉）

第Ⅳ期（9世紀第1四半世紀）　第Ⅴ期（9世紀第2四半世紀）　第Ⅵ期（10世紀後半）

第82図　谷ツ遺跡の集落変遷図

第Ⅰ期（第83図）

第15号住居跡のカマドを通る主軸線は、北方向を示している。標高約71.60mに位置し、この丘陵の上方にある。

第Ⅱ期（第83図）

4軒は、主軸線を主に北方向を向いている。西区の中腹に集中し4軒の平均標高は約76.45m（最高74.6ー最低78.0m）を測る。

第Ⅲ期（第84図）

2軒のみで、主軸線は北方向と西方向である。二軒の平均標高は約79.6m（77.0ー82.2m）を測る。

第Ⅳ期（第84図）

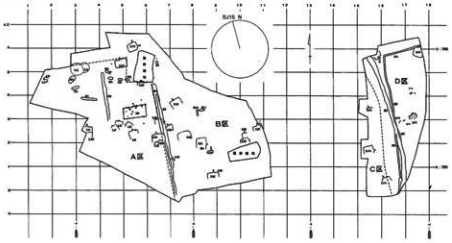
第Ⅳ期の3軒のうち、第18号住居跡は北竈から東竈へ造りかえられている。主軸線は第18号住居跡の東竈を除き北方向である。

北方向の竈が若干西に傾いているのは、斜面に対し垂直に住居を構えたためであろう。第4号住居跡と第24号住居跡の平均標高は76.3m（76.0ー76.6m）を測る。

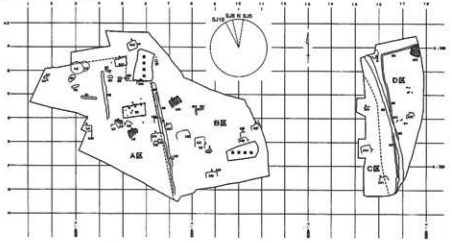
第Ⅴ期（第84図）

4軒の住居跡のうち、第1号住居跡だけが標高80.4mと斜面上方に位置し、主軸線は東方向である。それ以外の第10号住居跡、第27号住居跡、第31号住居跡は主軸は北方向、平均標高約74.1m（73.0ー75.4m）を測り、斜面下方に存在する。その位置は第Ⅳ期より若干下っている。この期も北竈がやや西方向

第Ⅰ期（～8世紀前葉）

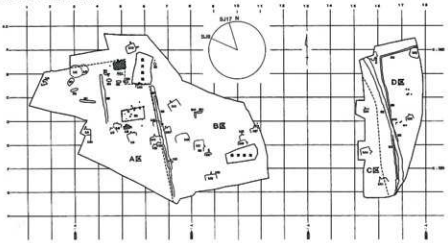


第Ⅱ期（8世紀前葉）

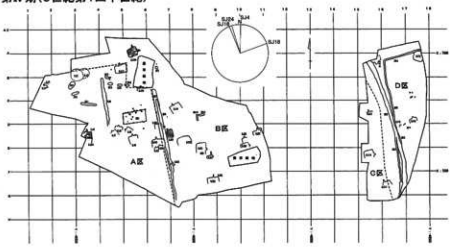


第83図　谷ツ遺跡の時期別集落変遷図（1）

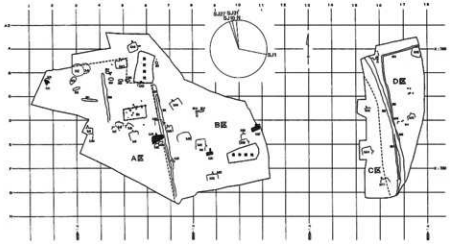
第Ⅲ期（8世紀後葉）



第Ⅳ期（9世紀第1四半世紀）

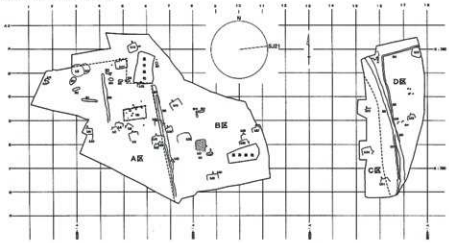


第Ⅴ期（9世紀第2四半世紀）



第84図　谷ツ遺跡の時期別集落変遷図（2）

第Ⅵ期（10世紀後半）



第85図　谷ツ遺跡の時期別集落変遷図（3）

に傾く。

第Ⅵ期（第85図）

第21号住居跡のみである。主軸方向は東方向で、斜面下方に存在する。標高は74.4mを測る。若干北向きに主軸が振れるのは、斜面に対し並行に構築したためであろう。

以上から、谷ツ遺跡には8世紀前半と9世紀前半の二度の集落のピークがある。加えて、各々の時期の中に、同程度の標高での2～4軒のまとまりが見出せる。

こうした斜面地の集落は、数軒から1～2軒といった程度の集落が多い。この谷ツ遺跡の場合も、同時期に営まれたのは同標高に位置する2～3軒（時期不詳のものを含めても数軒程度）であろう。共通の標高から外れるもの（例えば第Ⅳ期の第18号住居跡や第Ⅴ期の第1号居跡）は、主軸方向が異なる傾向が見られることからも、近接する別集落と想定できる。したがってこの谷ツ遺跡は、斜面地の小集落の集合体と位置づけられよう。

（3）粕川に臨む周辺遺跡

次に粕川沿いの周辺の遺跡に視野を広げてみたい。谷ツ遺跡は、嵐山町の東側を流れる粕川に開析された丘陵の小支谷に臨んでいる。南から北に流れる粕川に向かい東西方向に小支谷が発達しており、残された丘陵上に谷ツ遺跡に位置している。

同様の立地条件にある8世紀から9世紀にかけての周辺集落遺跡は、大木前遺跡・小栗遺跡・小栗北遺跡、粕川東側の丘陵上には蟹沢遺跡・芳沼入遺跡、やや下流の幅広の支谷に面してには柳沢A遺跡・柳沢B遺跡・台田嶺A遺跡・台田嶺B遺跡・中尾遺跡・年中坂A遺跡などがある（第86図）。

いずれも、粕川に流れ込む小支谷には挟まれた丘陵地の南斜面もしくは東斜面上に位置する点で共通の立地にある（註1）。

これらの遺跡と谷ツ遺跡の住居跡から出土した遺物について比較検討した結果、各住居跡の前後関係は、第87図のようになった。

各遺跡で検出された住居跡の時期別標高を（表4）にまとめた。粕川沿いの集落の居住は、8世紀後半から9世紀第1四半世紀にピークを迎える。またこの時期が標高の高いところ、すなわち小支谷の奥まで居住している事がわかる。

さらに細かく見ると

①8世紀前葉　丘陵南側および西岸の丘陵斜面下

方から居住が始まり、中腹まで拡大する。

②8世紀後葉～9世紀初頭　谷ツ遺跡の対岸、粕川東岸の丘陵斜面上方に居住の中心が移る。また、谷東岸で南側にみられる幅広の支谷の奥地まで拡大する。

③9世紀前半　居住の中心は粕川東岸のままである。斜面全体、とりわけ斜面下方まで居住に利用している。

上記の傾向から外れるのが大木前遺跡である。大木前遺跡の住居跡のほとんどが斜面下方に位置することから、この遺跡の性格が丘陵開発に関したものというより、「第一の集落」（渡辺2002）つまりは「サトの集落」であったと考えられよう。

（4）まとめ

谷ツ遺跡から始まり、粕川の両側に刻まれた小支谷に位置する8～9世紀の住居跡に拡大して眺めてきた。その結果、谷単位での丘陵利用の丘陵の同一標高単位での斜面利用とその拡大の様子が見て取れた。

今回の谷ツ遺跡の調査では、炭焼窯等の直接の丘陵開発の目的を示すような遺構は検出できなかった。しかし、谷ツ遺跡も他の丘陵上の遺跡同様、丘陵資源の開発に関係する遺跡であることは確かであろう。そして開発は渡辺一氏の述べる（前出）第1期の丘陵進出（8世紀初頭）と第2期丘陵進出（8世紀後葉から9世紀前半）の2度の波を例外なく受けた遺跡といえるだろう。　（成田友紀子）

（註1）台田嶺A遺跡・台田嶺B遺跡は、台田沼を谷奥とする支谷に面した立地とも考えられるが、つぐじ沼を谷奥とする小支谷に面する柳沢A遺跡・柳沢B遺跡からの移動も考えられるため両者を含めて検討した。

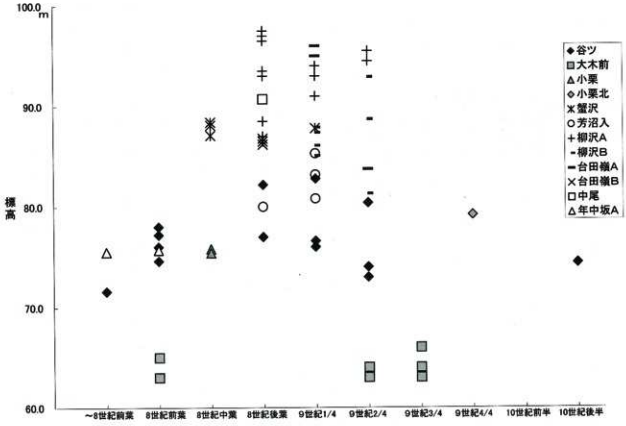


表4　粕川流域の住居跡の時期別標高

第86図　粕川流域の遺跡位置図

※表中の数字は住居番号を示す

	年代	8世紀			9世紀				10世紀～	
		前葉	中葉	後葉	1/4	2/4	3/4	4/4	前半	後半
		Ⅰ / Ⅱ		Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ				Ⅵ
粕川西岸	谷ツ遺跡	15		8 17		1 10 27 31				
		5 6 12 19			4 18 24					21
	大木前遺跡	25				4 12 13 18				
		17 23					5 6 8 26			
	小栗遺跡		1 4							
	小栗北遺跡							2		
粕川東岸	蟹沢遺跡		1 2 10		3					
				4						
	芳沼入遺跡			4						
					1 3 6					
	柳沢A遺跡			4 5 6 11 12 13 14 15		9 17				
					3 7 10					
	柳沢B遺跡				1 9 12 13					
						2 10 15				
	台田嶺A遺跡				1 2					
						3				
	台田嶺B遺跡			1 2						
	中尾遺跡			2						
	年中坂A遺跡	5								
		6								

第87図　粕川流域の集落変遷図

引用・参考文献

赤熊浩一　1989　「土師器の編年からみた須恵器の編年」『埼玉考古』第26号　pp11－14　埼玉考古学会

赤熊浩一　1999　『末野遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第207集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

井上尚明　1986　『将監塚・古井戸Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

岩田明広　1998　『宮ノ後遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第226集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

植木智子　1997　『滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群』滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群発掘調査会

金子直行　2002　『八木崎遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第281集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

川口　潤　1992　『蟹沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊・尺尻・尺尻北・大野田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第119集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団

栗岡　潤　2000　『如意・如意南』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第241集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

酒井清治　1984　『台耕地（Ⅱ）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

高柳　茂　1980　『羽尾窯跡』滑川村教育委員会

田中広明他　1997　『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

富田和夫　1985　『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
第46集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

富田和夫　1992　『稲荷前遺跡（A区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第120集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

富田和夫　1997　「関東西部」『古代の土師器生産と焼成遺構』pp153－168　窯跡研究会編　真陽社

富田和夫　2000　『大寄遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第268集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

富田和夫　2002　『熊野遺跡（A・C・D区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

贄　元洋　1998　「二川窯における灰釉陶器生産の出現過程」『三河考古』第11号　pp69－76　三河考古学談話会

福田　聖他　2002　『大寄遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

村上伸二　2000　『金平遺跡Ⅱ』嵐山町遺跡調査会報告９　嵐山町遺跡調査会

大和　修　1983　『若宮台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第28集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

嵐山町誌編さん委員会編　1983　『嵐山町誌』嵐山町

渡辺　一　1988　『鳩山窯跡群Ⅰ－窯跡編（1）－』鳩山窯跡群遺跡調査会

渡辺　一　1990　「南比企窯跡群の須恵器の年代」『埼玉考古』27号　pp123-145　埼玉考古学会

渡辺　一　1990　『鳩山窯跡群Ⅱ－窯跡編（2）－』鳩山窯跡群遺跡調査会

渡辺　一他　1994　「比企郡市における古代の概観－窯跡を中心として－」『比企郡市における埋蔵文化財の成果と概要』pp185－250
比企地区文化財担当者研究協議会

渡辺　一　1995　「丘陵開発論の現状と課題－台地研究から丘陵研究へ－」『比企丘陵』創刊号　pp1－11　比企丘陵文化研究会

渡辺　一　1997　「関東地方の土器生産－土器生産における二つの重層構造－」pp277－290　『古代の土師器生産と焼成遺構』窯
跡研究会編　真陽社

渡辺　一　2002　「古代の丘陵開発とその世界－『続風土記』の世界－」『あらかわ』第5号　pp113－134　あらかわ考古談話会

3．谷ツ遺跡出土土器の組成について

（1）土器の組成分析

8世紀前葉から集落が形成された谷ツ遺跡は、大里郡寄居町末野窯跡群と比企郡鳩山町南比企窯跡群の中間にあたる。低位丘陵の開発に挑んだ人々が、どのような地域間の交流を通じて窯業製品を獲得したかが、本節の課題である。

検討の材料は、谷ツ遺跡から出土した実測個体、非実測個体を問わずすべての土器片である。まず種別・器種・産地の分類を行い、各類型ごとに重量を計測した。本来は、この遺跡に持ち込まれた窯業製品の個体数を導きたいが、斜面地に形成された遺跡であること、棄損や欠損率が、個体によって異なるため、類型ごとの破片数や口縁部数による分析は行わなかった。

分類項目は、①種別　須恵器・土師器　②器種用途別に分類した後、器種分類を行った。食器は坏・椀・高台付椀・皿・高台付皿・蓋、煮沸具は甕・甑、貯蔵具は甕・壺・長頸瓶などである。そして③生産地は、以下の基準で抽出した。

生産地の分類

（1）須恵器

末野窯跡群　大形の礫や結晶片、石英や片岩の細片を含む。器肉は、発泡し膨らみ厚い。またロクロ目が明瞭に残る。

南比企窯跡群　いわゆる白色針状物質を含み、胎土は緻密である。器表は、滑らかである。器肉は、比較的薄く丁寧な造りとなっている。

（2）土師器

胎土a　利根川水系によって運ばれた原土を用いる土師器を一括した。角閃石を多く含み、丸みのある安山岩や片岩粒を含む。ややきめの粗い胎土で砂質である。大里地域の低地で採取した原土を用いたと考えた。

胎土b　安山岩や片岩粒を含まず、きめが細かく緻密な胎土で構成された土師器を一括した。比企丘陵とは限らないが、粘質化したロームを用いた土器と考えた。

胎土c　谷ツ遺跡の丘陵にもみられる白色礫を多量に含む原土と考えた。器肉は膨らみ、やや厚みがある。きわめて粗製の土器もみられる。

胎土d　角の取れた頁岩粒や片岩粒などを含む土器を一括する。砂質である。

胎土aは、大里地域のみならず、妻沼低地全体を含めて考えたい。また、胎土bは、児玉・大里地域も含めて考えた方がよいかもしれない。胎土cは、谷ツ遺跡周辺を離れると、共通の胎土をもった土器が確認できない。地域限定の製品と考えた。

なお谷ツ遺跡では、大里郡川本町如意遺跡にみられるような角閃石を含まず、片岩粒を比較的多く含む土器は見られなかった。

ここでは、個別の遺構ごとではなく、時期ごとに集計し、集落全体の消費傾向を探ることとしたい。ちなみにⅡ期は4軒、Ⅲ期は2軒、Ⅳ期は3軒、Ⅴ期は4軒、Ⅵ期は1軒の竪穴住居跡のデータを扱った。細かな数値データは、表5を参照していただきたい。

以上の条件に基づき、時期別に類型ごとの組成変化、そして産地ごとの消費動向を確認しておくこととする。

1　食器

第Ⅱ期　第Ⅱ期の遺物総量は、4668.7gである。第Ⅱ期の主体は、全体の80%を占める土師器の坏である。なかでも胎土cで作られた土師器が圧倒的に多く、60%を占める。残りは、胎土bと胎土cが9%づつ見られた。須恵器は、南比企窯跡群の製品が15%とやや多く、次いで末野窯跡群の製品が見られる。土師器の食器全体に占める割合の高さを再確認したい。

第Ⅲ期　第Ⅲ期の遺物総量は、6516.8gである。今

回の報告の中では最も資料の充実する段階である。第Ⅱ期に食器の6割を占めた胎土ｃの製品が、最も多いのは変わらない。また消費量も変化はないが、胎土ｂの土師器坏と南比企窯跡群の製品の消費量が相対的に上昇したため、胎土ｃの土師器坏は全体の40%となった。

この段階、南比企窯跡群では、果敢に生産が行われ、武蔵国全体に豊富な製品を供給し積極的な消費を促した。しかし谷ツ遺跡では、南比企窯跡群の食器は、全体の30%に留まる。なおこの段階の住居跡から比企型坏が、1点出土した。混入と考えられるが、この地域の7世紀の流通を考えたとき、興味深い資料といえよう。

第Ⅳ期　第Ⅳ期の遺物総量は、1256.2ｇである。第Ⅳ期は、資料数が減少し、重量比で5分の1程度となってしまう。しかし出土遺物の実に95%が、南比企窯跡群で生産された食器であった。つまり土師器の坏から須恵器の坏へと、食器は転換したのである。しかも食器は、南比企窯跡群の製品に限定され、末野窯跡群やその他の製品は、ほとんど見られない。

第Ⅴ期　第Ⅴ期の遺物総量は、1352.8ｇである。第Ⅴ期の資料数は、第Ⅳ期と変わらず食器は、南比企窯跡群の製品を消費していた。

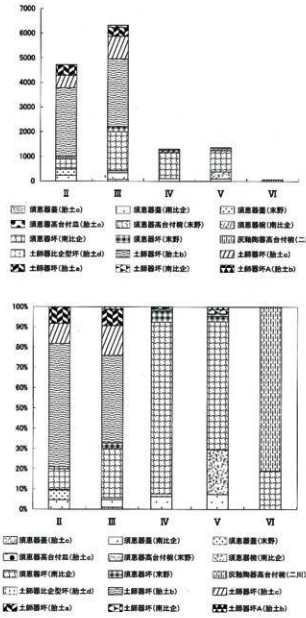
第Ⅵ期　第Ⅵ期の資料は極端に少なく、僅かに掲載資料程度である。また第Ⅴ期から連続しない。

2　煮沸具

第Ⅰ・Ⅱ期の遺物については分析可能な出土量がない。第Ⅲ期以降について略述する。

第Ⅲ期　第Ⅲ期の遺物総量は、10948.4ｇである。第Ⅲ期の主体は、全体の65%を占める胎土ａの甕である。胎土ｃも30%を占める。つまりこの集落の近くで採取した土を用いる土器が、3割を占めていたのである。

第Ⅳ期　第Ⅳ期の遺物総量は、2384.5ｇである。資料数が、5分の1となるのは食器と共通した傾向である。やはり胎土ａの甕が、80%を占める。胎土



第88図　谷ツ遺跡における食器の組成変化

b・cは極めて少ないが、消費量はⅣ期と変わらない。この傾向はⅥ期まで続く。

第Ⅴ期　第Ⅴ期の遺物総量は、2385.0ｇである。資料数は横ばいだが、胎土ａが全体の95%ととなる。

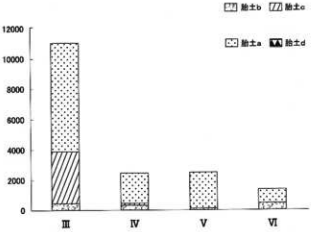
第Ⅵ期　第Ⅵ期の遺物総量はさらに半減する。主体は胎土ａの土師器甕である。この段階は第Ⅳ期と不連続であるため、ここでは参考にとどめておきたい。

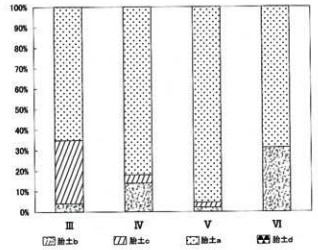
3　貯蔵具

貯蔵具は、末野窯跡群と南比企窯跡群の製品である。全時期を通じて南比企窯跡群の製品が、圧倒的に供給されている。ただしここに上げた資料は、破片資料の集合である。

消費量のピークは、第Ⅲ期と第Ⅴ期である。第Ⅲ期に7000ｇに近づくなど豊富な出土量が見られたが、その18%は末野窯跡群の製品であった。全時期を通じ１・２割は、末野窯跡群の製品が見られた。

以上のように谷ツ遺跡で消費された窯業製品の主体は、食器では胎土ｃの土師器坏から南比企窯跡群で生産された須恵器へと移行し、煮沸具では胎土ｃの土師器甕、そして貯蔵具では、南比企窯跡群の須恵器甕が、用いられたことが分かった。

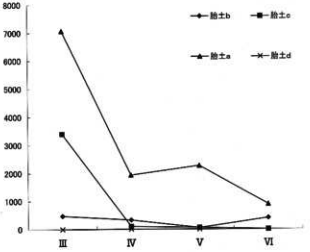




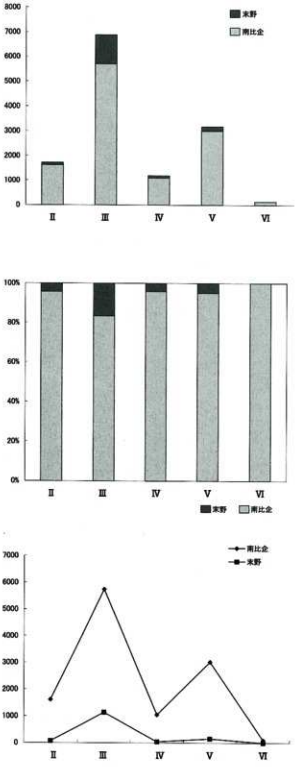
（2）谷ツ遺跡をめぐる流通

谷ツ遺跡は８世紀前葉から開始される遺跡である。渡辺一氏の分析（渡辺2002）で明らかなように周辺には、７世紀に遡る丘陵開発の痕跡を見い出すことはできない。しかし小川町岡原遺跡や越袴遺跡、あるいは嵐山町寺の台遺跡など、沖積地に臨む低い台地では竪穴住居跡を確認でき、また多くの群集墳が形成されていた。

ところで７世紀の比企丘陵から荒川周辺地域を知るために、７世紀の土器を出土した遺跡を第92図に示した。■は、有段口縁坏を出土した遺跡である。この土器は、埼玉県北部から群馬県の平野部にかけて広がる土器である。



第89図　谷ツ遺跡における煮沸具の組成変化



第90図　谷ツ遺跡における貯蔵具の組成変化

また▲は、比企型坏を出土した遺跡である。埼玉県南部から東京湾にかけて広がる土器である。両者は全く技術的交流を行わず、同一土器に互いの要素は相容れなかった。両者の分布域は、①比企丘陵の北側で交差せず、またグレーゾーンも生まないが、②旧荒川の流路以東、具体的には埼玉古墳群以南の遺跡では、両者を等量消費がみられる。

とくに①は、6世紀後半から8世紀初頭まで安定的にみられ、排他的な二つ領域を明確に示す境界線となっている。それは7世紀後半という評の編成段階にあっては、評域の境界線と等しいと仮に考えておきたい（注1）。

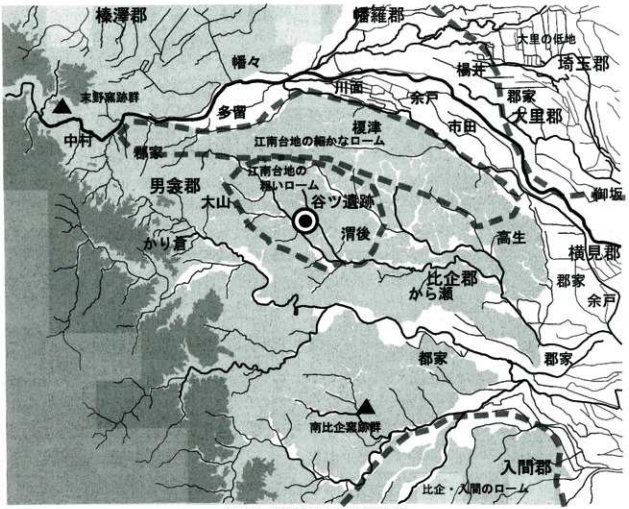
さて谷ツ遺跡は、この境界線の南側に位置している。また1点だけだが、比企型坏が出土している。これは谷ツ遺跡の成立段階は、比企型坏の領域、すなわち比企郡の領域内にあったと考えたい。

谷ツ遺跡が、他の比企丘陵の開発と同様、8世紀前葉から開始されるのは、渡辺氏が指摘したように丘陵「ヤマ」の克服が、仏教を背景とした新たな開発（注2）であったとすることもできよう。

ところが、第Ⅱ・Ⅲ期の食器は胎土bを用いた土師器坏であること、また煮沸具が、胎土aを用いた甕であることは、大里郡や男衾・幡羅郡などの地域で生産された土師器が盛んに用いられ、比企・入間地域の胎土で作られた土器は用いられなかったことを示す。当然、谷ツ遺跡では、富田和夫氏のいう「続比企型坏」のような比企型坏に後続した食器は見られない。

さらに胎土cの土器が、第Ⅱ・Ⅲ段階に組成の一割を占めたことは、見過ごすことのできない事実である。これを食器の欠を補うため製作したか、比企丘陵内で限定生産された製品を消費したと見るか、論の分かれるところである（注3）。

さらに第Ⅲ期以降、南比企窯跡群の製品の消費量が上昇し、第Ⅳ期以降になると、ついに土師器が消費されなくなる。南比企窯跡群の盛んな操業と積極的な供給が、この丘陵の集落へも行きとどいたからである。しかし土師器甕は、胎土aを用いた製品が依然として用いられ、大里地域からの供給を受けて



第91図　谷ツ遺跡への土器の供給

いたことを示す。この傾向は第Ⅴ期まで継承されることとなる。

そしてやや離れるが、第Ⅵ期最後の竪穴住居跡では、灰釉陶器や酸化炎焼成の小皿、土師器の土釜などが消費された。この段階に灰釉陶器を見ることは、武蔵国では珍しくないが、こと比企丘陵はエアポケットのように灰釉陶器の出土は、極端に少ない。

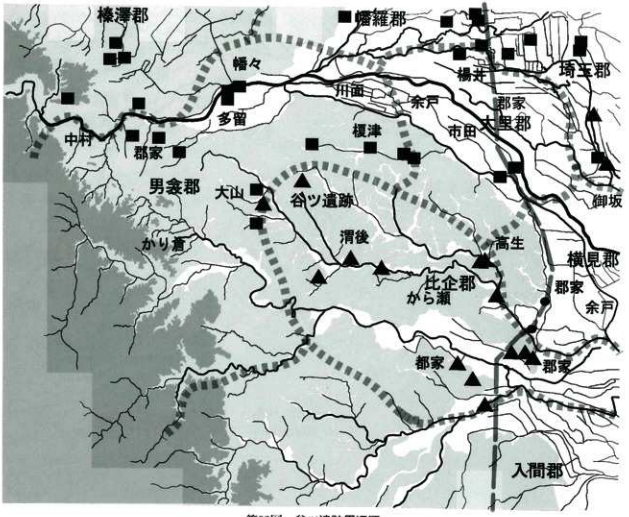
ちなみにこの段階の灰釉陶器は、小川町六所遺跡（小瓶）、慈光平廃寺（広口長頸瓶）、川本町白草遺跡（小瓶）、嵐山町日向遺跡（長頸瓶・椀）など東濃地方で生産された製品である。全て虎渓山１号窯式である。いずれも瓶類を主体とし、食器は僅かに日向遺跡と谷ツ遺跡だけである。

Ⅵ期には、比企丘陵の開発が新たな段階に入ったこともあり、集落も小規模拡散化の方向をたどる。東濃地方の灰釉陶器を消費していたことは、東山道経由の商品を獲得するチャンネルが、この小さな集落にも開かれていたことを示す。

白草・芳沼入遺跡でもこの段階の土器が、末野窯跡群や大里地域の土師器に頼っていたことを考えると、南（南比企・入間地域）からの物質の供給から、北（男衾・北武蔵・そして上野国）からの供給へ転換したと考えたい。

８世紀前葉から９世紀にかけて、この丘陵開発に挑んだ集落の鍵を握るのは、やはり仏教系遺物の出土であるかもしれない。

比企丘陵で出土した仏教系遺物は、全て南比企窯跡群で生産され、丘陵内の竪穴住居へもたらされた。谷ツ遺跡の30図―10と37図―１の土器もともに南比企窯跡群の製品である。



第92図　谷ツ遺跡周辺図

そして谷ツ遺跡のような斜面地に営まれた比企丘陵の遺跡では、竪穴住居跡10軒に1点の割合で仏鉢や佐波理模倣埦を所有するのに対して、妻沼低地や大宮台地では、50軒に1点程度の割合に過ぎない。

これはいかに比企丘陵の集落が、仏教系遺物を所有するかを示す数値である。また比企丘陵にもたらされた仏教系遺物のほとんどは、南比企窯跡群で生産された製品である。とくに佐波理模倣埦の蓋は、関東地方の他の窯では全く生産しておらず、南比企ブランドともいえる製品である。

以上、谷ツ遺跡は、他の比企丘陵の斜面に点在する集落と同様、南比企と北武蔵に流通のチャンネルを開き、仏教系遺物を操りながら丘陵開発に臨ませた経営者の存在を背後に伺わせつつ展開した遺跡の一つといえよう。　(田中広明)

(注1) 比企丘陵に築かれた横穴式石室には、複室胴張型の横穴式石室と単室直線胴型の横穴式石室がある。前者は比企丘陵の奥部から丘陵東部に広く分布し、後者は寄居町から熊谷市にかけての荒川流域に分布する。また使用された石材は、前者は比企丘陵内に産出する凝灰岩が、後者は河原石の転石が用いられる。土師器の食器と横穴式石室では、分布にずれが見られる。前者は直接的な消費、後者は石室を構築した工人の移動という間接的なグループのためであろう。

(注2) 渡辺　一　2002　「古代の丘陵開発とその世界―続風土記の世界―」『あらかわ』第5号

(注3) ちなみに秩父郡皆野町栗谷ツ遺跡では、きわめて粗悪な原土を用いた土師器の一群があり、近隣遺跡に類例を見ないことから、食器の欠を補なうため臨時に補完するため製作したと考えた。

遺構名	種別	器種	産地	総重量（g）
第１号住居跡	土師器	坏A	胎土ｂ	18.1
第１号住居跡	土師器	甕	胎土ａ	475.6
第１号住居跡	土師器	甕	胎土ｂ	32.7
第１号住居跡	土師器	甕	胎土ｃ	59.8
第１号住居跡	須恵器	坏	南比企	27.7
第５号住居跡	土師器	比企型坏	胎土ｄ	10.7
第６号住居跡	須恵器	蓋	末野	232.7
第６号住居跡	土師器	坏	胎土ｃ	471.7
第10号住居跡	土師器	坏	胎土ｂ	15.1
第10号住居跡	土師器	甕	胎土ａ	1798.2
第10号住居跡	須恵器	坏	南比企	859.7
第10号住居跡	須恵器	坏	末野	35.5
第10号住居跡	須恵器	椀	南比企	307.0
第10号住居跡	須恵器	蓋	南比企	89.8
第10号住居跡	須恵器	甕	南比企	2838.4
第10号住居跡	須恵器	甕	末野	160.4
第12号住居跡	須恵器	坏	南比企	477.3
第12号住居跡	須恵器	坏	末野	36.2
第12号住居跡	須恵器	高台付椀	末野	16.6
第12号住居跡	須恵器	蓋	南比企	202.9
第12号住居跡	須恵器	甕	南比企	1614.0
第17号住居跡	土師器	坏	胎土ａ	528.1
第17号住居跡	土師器	坏	胎土ｂ	2784.8
第17号住居跡	土師器	坏	胎土ｃ	966.9
第17号住居跡	土師器	甕	胎土ｂ	477.4
第17号住居跡	土師器	甕	胎土ｃ	3400.1
第17号住居跡	土師器	甕	胎土ａ	7070.6
第17号住居跡	土師器	蓋	胎土ｃ	68.7
第17号住居跡	土師器	高台付皿	胎土ｃ	9.9
第17号住居跡	須恵器	坏	南比企	73.5
第17号住居跡	須恵器	坏	南比企	1613.6
第17号住居跡	須恵器	坏	末野	189.5
第17号住居跡	須恵器	蓋	末野	36.6
第17号住居跡	須恵器	蓋	南比企	245.2
第17号住居跡	須恵器	長頸瓶	南比企	161.0
第17号住居跡	須恵器	甕	南比企	5584.6
第17号住居跡	須恵器	甕	末野	1139.2
第18号住居跡	土師器	坏	胎土ｂ	11.8
第18号住居跡	土師器	坏	胎土ｃ	6.1
第18号住居跡	土師器	甕	胎土ｃ	102.1
第18号住居跡	土師器	甕	胎土ａ	1939.6
第18号住居跡	須恵器	坏	南比企	1074.3
第18号住居跡	須恵器	蓋	南比企	76.2
第18号住居跡	須恵器	蓋	末野	17.2
第18号住居跡	須恵器	甕	南比企	1051.1
第19号住居跡	土師器	坏	胎土ａ	378.6
第19号住居跡	土師器	坏	胎土ｂ	2841.8
第19号住居跡	須恵器	甕	東金子	38.8
第19号住居跡	須恵器	甕	末野	72.6
第24号住居跡	土師器	甕	胎土ｂ	336.1
第24号住居跡	土師器	甕	胎土ｄ	6.8
第24号住居跡	須恵器	坏	末野	70.7
第24号住居跡	須恵器	甕	末野	46.4
第27号住居跡	土師器	台付甕	胎土ｂ	18.8
第27号住居跡	須恵器	甕	南比企	189.1
第31号住居跡	土師器	甕	胎土ｂ	403.8
第31号住居跡	土師器	甕	胎土ａ	889.5
第31号住居跡	須恵器	坏	二川K-90	27.0
第31号住居跡	須恵器	坏	南比企	6.4
第31号住居跡	須恵器	甕	南比企	97.7

※本文中の観察表のＨＳも須恵器に含めた

表５　谷ツ遺跡出土遺物基本データ

4．谷ツ遺跡の城郭遺構について

所在地　比企郡嵐山町杉山字谷ツ

位　置　関越道小川嵐山インター新設工事に伴う発掘調査によって新たに所存が確認された中世城郭遺構と見られるものである。杉山城跡とは谷を挟んで対峙する位置を占め、杉山城跡北東500ｍに位置し、市野川の支流粕川の谷に向かって舌状に突き出す標高78.3ｍの丘陵先端部に築かれる。

この地点に、城郭等が所存したことは全く記録に無く、阿部家にもその伝承は存在しない。中世城郭と考えられる新発見の遺跡であるといえる。

遺　構　比高21ｍ程の丘陵は南北を溺れ谷に挟まれる幅120ｍ程の狭い丘陵で、越畑城方向から南東に延び、粕川の谷津を見下ろす絶好な位置を占める。

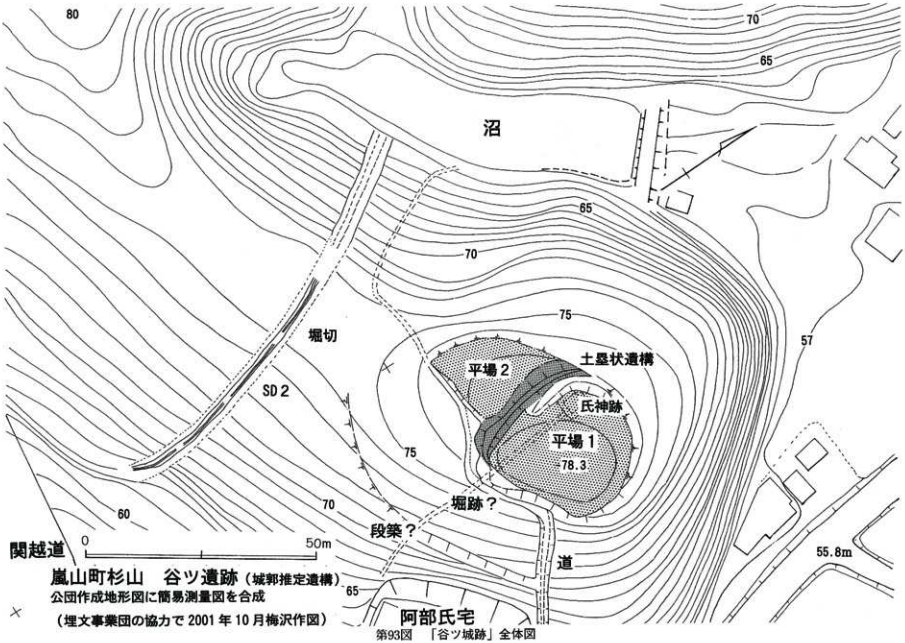
発見された遺構は、関越道小川嵐山インターの建設に伴う財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の発掘調査によって平安時代の集落調査が行われ、調査区東端部から上幅1.8～２ｍ、深さ1.5～２ｍの薬研堀が検出されたことによる。この堀は舌状丘陵の括れ部を丘陵裾から完全に掘りきって存在する大規模な遺構で、その構造からは、明らかに中世城郭に伴う堀切と見られるものであった。県文化財保護課や財団職員の要請によって調査をしたところ、道路敷地外の丘陵先端部上に明らかに人為的な造作を加えたと見られる部分が確認でき、この地点に城郭が形成されていたと考えられた。

我々が確認した遺構は丘陵先端部の標高78.3ｍ地点の平坦部を東西25ｍ南北26ｍほどの郭を中心とするもので、備えは杉山城跡方面に意図的に形成されていることが理解される。周辺は切り落とされるが、南部は1.5ｍ程に鋭く切り落とし、西部には高さ60㎝ほどの土塁状の高まりが見られる。しかし、この反対側となる方面は大した造作は行われなかったのか明瞭な形で切り落とし遺構を確認できない。そして、東南から南西にかけては切り落とし下部が現状では通路になっているが、平面屏風折りになるこの通路はあるいは空堀と観察できるかもしれない。通路は東南で阿部氏宅東側に下るが、10ｍ下った地点で西に延びる高さ1.5ｍ程の切り落としが形成され、西端部は明らかでないものの、２段築成による防御が行われていたことを伺わせる。なお、堀切から主郭西部の土塁状遺構までの距離は50ｍほどである。堀切は先にも記したように上幅1.8ｍ～２ｍ、深さ1.5～２ｍの箱薬研堀となるが、北斜面にはこの延長部の堀跡が確認でき、現状で上幅5ｍ、深さ60㎝ほどに観察される。そして、この東側には幅３ｍで高さ１ｍほどに盛り上がった土塁状の高まりが見られるが、これは掘り上げ土を置いた痕跡であるだろう。堀切は丘陵裾部まで築かれていたようで、現状でも沼の縁の平坦地まで下っているのが確認された。

尚、主郭西部に残る阿部家氏神跡の西に堀状の窪地が見られるが、これが空堀等の遺構であるという確証はつかめない。

年代は不詳

2001．10．調査　梅沢太久夫記録



第93図　「谷ツ城跡」全体図